

大正期（その 9）

～「相中相高八十年」より～

9 読み物検閲と同盟休校

第九代千秋穂三郎校長は、世界思潮の混乱と自由主義が謳歌される時代の影響が、学校内にも色々な形でその兆候が見え始めてきたのを懸念し、生徒訓育上からも好ましくないと考えて、綱領を定め、生徒の思想に悪影響を与える読物、軟弱に陥り易い雑誌小説類の読書を全面的に禁じたのである。

この他、映画鑑賞（学期末試験あとなどの中村座での見物は許可）や飲食店への出入り、環境の悪い町筋の通行、夜間の外出なども禁止された。このように学校外での生活まで規制され、生徒指導の徹底が強化されていった。

1925（大正 15）年、千秋校長は、『改造』や『革命』などの左翼雑誌を、下宿生たちが回し読みしているという噂を聞き、教師数名を下宿生の部屋に向かわせ、生徒の授業中所持品と読物を検閲した。生徒には事前の了解も得ず、予告なしの抜き打ち検閲だったことから、当の下宿生はもちろん、松野一盛^(註1)（元磐城高校長）や中沢直亮^(註2)（元私立幼稚園園長）などの五年生（相中 24 回生）全員は「授業中の生徒の下宿で所持品検査をすることは先生といえ越権行為もひどい」と激怒して、天明山に集結して血判書を作って同盟休校に突入した。

事態を重視した学校当局は再三職員会議を開いて打開策を協議したり、保護者会を開いて父兄の協力を要請したが解決せず、最後の手段とばかり人情家で生徒の信頼が厚かった乙組級監の高野藤三^(註3)（相中一回生・国語漢文）に生徒のたてこもっている天明山行ってもらい説得を試みた。しかし、いかに人望のある高野教諭の説得でも生徒の団結の固さに通用せず失敗に終わった。

寄宿生や下宿生の五年生は全員荷物をまとめて帰宅した。同盟休校は一か月の長期間に及んだ。しかし、参加した 24 回生は長期にわたる同盟休校に次第にあせりを感じはじめ、家におれば親に怒鳴られるし、血判を押した以上は簡単には学校に戻れないジレンマに苦しんだ。

生徒を心配して学校側が取った措置だったが、生徒には納得出来ないことであつたのだろう。この家宅検閲の結果、当初心配していた読物などは何一つ発見されず結局は不発であつた。

この同盟休校は終始秩序整然と行なわれ無抵抗主義だった。これに参加した 24 回生は学校に戻ってからは一か月の勉強の遅れを取戻そうと一所懸命頑張ったという。

大正期には、以上二つの（第 38 号、第 39 号）の同盟休校のほかに、先生の飲酒のことから授業をボイコットしたり、校長排斥を求めての同盟休校や学校に対する不満が爆発して起った同盟休校などはなやかな時代であつた。



鈴木安蔵を中心にした 20 回生たち



ロングラン同盟休校を決行した 24 回生たち

(註1) 旧姓 渡部 石神出身

(註2) 旧姓 星 石神出身

(註3) 中村出身

(12月22日 転記文責 村山)